

完全皮下埋め込み式中心静脈ポートからの脂肪乳剤投与により頻回のカテーテル関連血流感染症をきたした一例

JA 三重厚生連鈴鹿中央総合病院 1)薬剤部 2)NST 3)緩和ケア内科

溝口紗和子<sup>1)2)</sup>、寺邊政宏<sup>2)3)</sup>、田中里奈<sup>1)2)</sup>、藤田征志<sup>1)2)</sup>

【はじめに】完全皮下埋め込み式中心静脈ポート（以下、ポート）から脂肪乳剤を投与し、カテーテル関連血流感染症（以下、CRBSI）を繰り返した症例を経験したため報告する。

【症例】89歳男性。下咽頭の肉芽種による狭窄があり唾液嚥下も困難であった。経口、経管栄養が困難なため栄養法としてTPNが選択された。右鎖骨下静脈経路でポートが造設され、脂肪乳剤の投与も行われた。その後、2度に渡りCRBSIのため挿入後81日目と74日目にポートが抜去された。2度目の抜去時にポートを分解したところ、ポート内とカテーテル先端に脂肪の沈着と思われる塊が認められた。3度目の造設時には脂肪乳剤投与後のパルシングフラッシュや脂肪乳剤の投与を必要最小限にするなどの管理を行ったが再びCRBSIを起こした。

【考察】脂肪乳剤のルートへの沈着は、感染症を引き起こすリスク因子である。ポートはその構造からも沈着を起こしやすいと考えられる上、ポート内の沈着が確認できない。今回、脂肪乳剤の沈着がCRBSIの発生にどれだけ関与したか不明であるが、ポートからの投与が必要な場合は、フラッシュの工夫や漫然とした脂肪乳剤投与の回避をすべきと考えられた。